Let's Green & Clean
一橋植樹会

第４版

一橋植樹会の歩み

2023年、一橋植樹会は創立50周年、
新生一橋植樹会は発足20周年を迎えました

佐野善作先生が見つめる中、芝刈りに精を出す

学生との共同作業で若返る会員たち

東本館を背に作業手順を確認

第４版刊行に寄せて

一橋植樹会の歴史を記した「一橋植樹会の歩み」は 2015 年８月に第３版が刊行されました。それ以来既に８年が経過しています。また 2023 年は一橋植樹会が創立されてから 50 周年、現在のような活動内容になった新生植樹会になってから 20 周年の節目の年に当たります。これを記念して第４版を刊行し、これまでの歴史を振り返ることに致しました。

この８年間を振り返ると最初の５年間の特徴は定例作業以外の臨時作業の増加です。広大な大学構内の整備を満足出来る水準に保つためには定例作業だけではとても賄えないので、幹事を中心とする有志が自発的に臨時作業を開始し、回数、参加人数とも着実に増加しました。この中には体育会の運動部各部との共同作業の恒例行事化も要因として含まれています。後半の３年は新型コロナ感染拡大の影響です。2020 年２月を最後に大学構内は入構禁止となり定例作業・臨時作業とも中止を余儀なくされました。７月になって植樹会からの臨時作業再開の要望に対して許可が大学から出て、少人数の幹事を中心とする臨時作業を週１回のペースで行うことになり、大学構内の緑の環境を整然と維持することが可能になりました。コロナ禍前から臨時作業を増やしていて体制が出来ていたおかげだと思います。

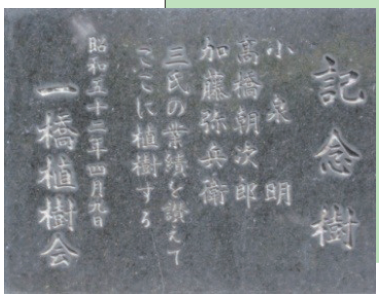
第４版を編纂するにあたり、編集会議を開催し、これを読むだけで一橋植樹会の 50 年の歴史がつかめる内容とすることを目指し、過去の記事の幾つかは再録しています。特に 2010 年４月に開催された「植樹会の転換期」と題された座談会は新生植樹会の理念が大変よく分かる資料なので、そのまま掲載しています。それに加えて今回新たに座談会を開催し、この８年間の成果と今後の課題に関して討論しています。両方の座談会に参加しているのは顧問の福嶋司先生だけです。先生には新生植樹会の活動指針になった緑地基本計画作成に大変大きな役割を果たしていただきました。緑地基本計画は 2015 年に改定されましたが、2025 年に向けて第３次改訂作業にそろそろ取り掛かる時期に来ています。この間「松枯れ」問題に加えて「ナラ枯れ」の蔓延など新たな問題が発生し、それへの対応も必要ですが、当初の緑地基本計画の中核であるゾーニングの概念に関しては今後とも大きな変更は必要ないと考えています。

2023 年４月からは定例作業を再開できる運びとなり、植樹会活動はようやく正常に戻ります。多くの卒業生・学生の皆様と一緒に作業できることを楽しみにしています。本冊子が、読者の皆様の 50 年に及ぶ一橋植樹会の歴史を理解する一助となり、将来の活動に向けての参考になれば幸いです。

2023 年４月

一橋植樹会会長　河村　進（昭 49 経）

西暦		植樹会関連トピックス	学内トピックス	学外トピックス
1967	昭42	**増田学長の植樹運動提唱** 「昭和40年代初め、国立キャンパスにある松が異常に多く枯れてゆくのに気づき、何とかこれを食い止めたいと、如水会報に拙文を載せたところ、花いっぱい運動にご熱心であった加藤彌兵衛さんなど多くの会員から関心を寄せられ、母校への植樹運動が盛り上がってきた」（如水会々報） 「増田先生は、毎日学内を散策、国立の一木一草を思いを込めてご覧になっておられた。学園紛争当時、先生は一木一草に深い何かがあることに思いをいたし母校の環境を憂える気持ちでご覧になっておられたのであろう」（後年の阿部学長の植樹会総会時挨拶に）		ASEAN 結成 EC 発足
1968	1月 昭43	加藤彌兵衛氏（明39本）ら「母校へ植樹を」運動スタート、有志が『募金』を募り、以降毎年大学に寄付 総会で挨拶をされる増田四郎副会長	学生自治確認書取り交わし	伊藤整氏（昭6学）芸術院会員となる 文化庁設置
1969	昭44		大学紛争	大学紛争 アポロ宇宙船月面着陸
1970	昭45			大阪万博、三島由紀夫自殺
1971	昭46		千代田区に「一ツ橋」の町名維持の努力が結実	沖縄返還協定締結 ドルショック
1972	昭47		一橋寮竣工	札幌冬季五輪
	8月	世話人会が開催された。主だった世話人の方々は増田四郎、加藤彌兵衛、石川善次郎、横田毅一郎各氏		日中国交回復

西暦		植　樹　会　関　連　ト　ピ　ッ　ク　ス	学内トピックス	学外トピックス
1973	昭48		学部入学生数722名	
	10月	26日創立総会開催　初代会長に本田弘敏氏（大10本）就任		金大中事件
		植樹会の目的と事業 「一橋植樹会は一橋大学のキャンパスの緑化推進、環境整備に必要な援助をすることを目的とする。 「必要な援助」は財政的援助、樹木や草花などを寄付する物的援助ないし労力奉仕などを含む」 （定款から） 同時に、創立総会以降に繰り返し説明されてきた「理念」がこのとき表明されている。 1、学園キャンパスの荒廃に立ち向かうの精神 2、環境整備の一助となる 3、「母校に緑と花」運動に力をいれ会員を増やす 以下、本田弘敏初代会長の挨拶から 「美しい自然の赤松に囲まれた国立の緑深い環境は教育の場として本当にすばらしいものでした。ところがその後、樹齢のためか、大気汚染のためか松の立ち枯れが目立つに至り、時の増田学長はその対策に腐心、大学の環境保持に努められたのに呼応して、先年来加藤彌兵衛大先輩方が率先「植樹」運動を起こされてきたのであります。今回この運動を組織化することになり『一橋植樹会』が強力に発足することになり・・・・」「・・・・大学百年の大計のため極めて有意義な事業であり・・・」		円相場変動制へ 戦後初マイナス成長
1974	昭49			
	4月	観桜会開催		
	10月	植樹会；初年度1年で寄付・会費184万円に上った ヒマラヤ杉の植樹 (1975年)	昭和40年代のキャンパス全景	
1975	昭50			
	4月	第2回総会での報告から、「NY支部寄付により金木犀を植樹」	一橋大学100周年記念式典	ベトナム戦争終結
1976	昭51		同100周年記念事業スタート	ロッキード事件、毛沢東死去
	4月	第3回総会時に観桜会実施		
1977	昭52			日航機ハイジャック事件
	4月	第4回総会開催時に一橋百年記念・渋沢栄一翁の生家訪問・植樹祭・端艇部激励会・寮歌祭合同の懇親会開催 「海外支部の寄付によりｶｲﾂﾞｶｲﾌﾞｷ、ﾂｹﾞを植樹」 植樹記念碑 	授業料96千円／年となる	
1978	昭53			日中平和友好条約調印
	4月	第5回総会開催、本田会長の挨拶から 「会員の皆様の熱心な後援により、母校一橋大学キャンパスの植樹および環境整備のために寄せられた会費および寄付金は、累計600万円余になります。一方、これによる事業のほうも着々と進みまして、・・・・学園紛争のころの荒廃したキャンパスの状況と比べれば、全く今昔の感があるといってよい位、美しく整備されてまいりました。 古来、『明媚なる山水は偉人を生む』と申しますが、私は、このような環境整備に伴って、一橋大学が邦家のために有為なる人材を生むであろうことを、大いに期待する次第です。私は、本会の事業が草創期を経て、今や成長期に入ったと考えております」		大平首相就任 植村直巳犬ぞりで北極点到達 1ドル200円を切る
1979	昭54		共通一次試験スタート	ソ連アフガン侵攻
	4月	第6回総会開催		サッチャー政権誕生
1980	昭55	第7回総会記録に「『大学キャンパス総合環境整備計画』後援の件を満場一致で可決」 同報告事項中から 「思索の森」の造園（太田可夫教授ゆかり）、アメリカハナミズキ植樹（水上達三氏寄贈）、百周年記念碑の設置」	図書館新館竣工	海外旅行本格化 イラン・イラク戦争

西暦		植　樹　会　関　連　ト　ピ　ッ　ク　ス	学内トピックス	学外トピックス
1981	昭56		授業料18万円 / 年となる	
	4月	第8回総会開催 総会後の記念撮影		中国残留孤児初来日 田中康夫氏「なんとなくｸﾘｽﾀﾙ」で「文芸賞」受賞 中教審「生涯教育について」答申 気象衛星「ひまわり2号」打ち上げ成功
1982	昭57		国立天下市、一橋祭共催スタート	
	2月	増田学長の言葉「初代会長本田氏を偲んで」から 「本田さんは、この運動の純粋さに賛同され、いつも「こんな気持ちのよい会はない」といって、終生この運動の推進に尽瘁されたのである。そして毎年春4月に、花見をかねておこなう国立での植樹会総会には、どんなに忙しくとも必ず出席され、樹木の整ってきた小平と国立のキャンパスを見てまわり‥‥」		フォークランド紛争
	4月	第9回総会開催、会長に竹村吉右衛門氏（大13学）就任 宮澤学長、竹村新会長、増田副会長、水上達三氏	新如水会館竣工	中曽根政権誕生 歴史教科書問題が発生 歴史教科書問題が発生 国際捕鯨委員会で、商業捕鯨の全面禁止を決定。
1983	昭58		森社会工学学術奨励金発足	「おしん」視聴率65%
	4月	第10回総会開催、竹村吉右衛門会長の挨拶から 「樹木というものはなかなか成長しないように見えながら、案外に早いもので、校内の木々もここ数年の間に見違えるように成長し、戦後の荒廃、学園紛争時代の有様を知る我々にとりましては、まさに今昔の感があります。　-- 中略 --　問題は、今後これをどういう風に保守していくかであります。環境整備ということは、建設することよりも保守する事が大切で、今後ともこの点につきまして学校当局ともよく相談し、武蔵野の一角にわずかに残りましたこの美しいキャンパスの環境整備に努めたいと存じます」 総会報告から、「植樹会創立（昭48）から57年度末までの大学への寄付額は累計で985万円となる」		三宅島噴火
1984	昭59		一橋大学公開講座第一回開催	グリコ・森永事件
	4月	第11回総会開催、報告から 「学校当局から　記念植樹に際しては造園計画、あるいは維持管理の点から事前協議の要望をいただいた」		多摩川にサケ戻る
1985	昭60		大学で室田助教授（当時）を中心に学内緑化運動	
	4月	第12回総会開催、会長に水上達三氏（昭3学）就任 総会議題、3号議案に関して出席者の発言から 「基本問題というのは、最近の植樹会の寄付金の逓減傾向を憂える所から、この運動の基本的あり方を根本的に考えていただきたいという主旨のもので、将来計画を常務理事会に付託して立案していただきたい」 総会の様子	都留重人名誉教授ハーバード大学から名誉博士号授与	日航機御巣鷹の尾根に墜落 NTT、JT 民営化決定
1986	昭61		一橋フォーラム21開講	チェルノブイリ原発事故
	4月	4月第13回総会開催 年度報告の中に「東校舎本館の正面玄関付近ほか整備した」とある。 なおこの年、「国費による環境整備費は18百万円余で松のコモ巻きほか、東校舎体育館・部室周辺、フェンス沿い及び佐野書院等の環境整備しました」との記録あり（如水会々報）		前川レポート

西暦		植　樹　会　関　連　ト　ピ　ッ　ク　ス	学内トピックス	学外トピックス
1987	昭62		如水会大学海外派遣留学制度創設	JR 発足
	4月	第14回総会開催	『一橋論叢』第100巻刊行	大学審議会設置法案可決
1988	昭63			
	4月	第15回総会開催、川井学長の挨拶から 「外国から見えた方々も一様に一橋大学の美しさを賞賛されるが、これもひとえに植樹会が母校の環境美化に尽力されているお蔭と感謝しつつ、こうした支援に報いるためにも大学は研究面からの内容充実に努めてゆきたい」 年度報告の中に「矢野先生銅像周辺整備（樹木剪定、敷石敷設）」とある。		青函トンネル開通 消費税導入
1989	平1			天安門事件、ベルリンの壁崩壊
	4月	第16回総会開催		
1990	平2			バブル崩壊　長期不況へ
	4月	第17回総会開催、会長に植松健悟氏（昭14学）就任		
1991	平3		宮川教授図書館長に就任	湾岸戦争勃発
	4月	第18回総会での報告から「産業経営研究所の西南側環境整備（植栽および遊歩道設置）に注力した」		ソ連邦崩壊
1992	平4			
	4月	第19回総会開催、塩野谷学長の挨拶から 「母校キャンパスはお陰様で日本国内では相対的には良好である、しかし、今後は環境の維持・管理が植樹以上に大事になる。植樹した樹木の全体の調和を維持し管理していくことがこれまで以上に大切である。・・・本来ここ国立キャンパスは松風の吹くところであった」	国際交流会館完成	銀行不良債権問題激化
1993	平5			Ｊリーグ開幕
	4月	第20回総会での報告から 「平成5年度　第一新館南側環境整備に注力した」	３８機関との間で国際交流協定締結	細川内閣成立
1994	平6			
	4月	第21回総会開催、その議事録から 「故茂木啓三郎理事の追悼に当たっては、『募金というものは集まった金額の多寡ではなく、寄付に参画されたかたがたの人数が大切だ』と生前おっしゃっておられた」		
1995	平7		佐野書院改築完成	阪神大震災
	4月	第22回総会開催	留学生総数300名を超す	公定歩合を史上最低の0.5% に引き下げ
1996	平8		小平キャンパスの改革・国立への統合・移転	
	4月	第23回総会での報告から 「昨年度東キャンパス合同棟周囲の環境整備に注力した」		

８０年代と９０年代の一橋植樹会

故：白石　武夫（昭35法）

桜咲く小平分校の階段教室などを見学

私が如水会事務局の総務部長、業務部長として、植樹会の運営にかかわっていたのは１９８３年４月から２００２年４月までのほぼ２０年、タイトルの時代区分、その流れの「時」と一致する。

この時期の植樹会の活動状況はあえて一言で言い表せば「マンネリ化」であったといえる。つまり、草創期のあの熱が冷めたかのように年1回の定例総会のみが年中行事と化し、十年一日のごとき筋書きで会が運営されていた。

当時　監事で、植樹会運動に大変熱心であった故中村達夫氏(昭１６学後）が、「マンネリに堕した本会をどうするのか、どういう方向に持っていくのか」といったことを総会の場で発言しておられたことを思い出す。マンネリ化の状況を指し示す具体例を思い出すままにいくつか挙げてみる。

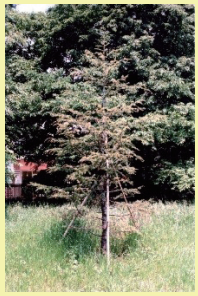
①総会の題が　「植樹会と観桜会」となっており、「お花見がてら総会にどうぞ」といったニュアンスであった。

②総会出席者の顔ぶれは、林鷹治大先輩（大12学）、一番下が昭和４５年卒の田中襄一、樋浦憲次の両君といった具合でほぼ常連化していた。

③７８年（昭和５３年）の第５回総会までは、毎年会費収入も百万円を超え、母校にほぼ同額を寄付してきたが、第６回あたりからその額も減少傾向になってきた。そのため相応の寄付を維持すべく、８７年の第１４回総会から、毎年如水会から３０万円の補助をうけるようになった。

このような中で、私はある会合で、当時植樹会副会長であった増田四郎先生（昭７学、元学長）に「一定の役割を終えた植樹会は解散したらどうでしょうか」と話を切り出したことがあった。すると先生は「白石君、植樹会はいかにも一橋らしい精神運動なんだよ」と爽やかな笑顔で答えられた。

それ以来私は、先生のお言葉の哲学的含意を考え続けてきた。（了）

西暦		植　樹　会　関　連　ト　ピ　ッ　ク　ス	学内トピックス	学外トピックス
1997	平9		東ｷｬﾝﾊﾟｽ講議棟２号館完成	京都議定書
	4月	第24回総会開催、植松会長の挨拶から 「東校舎周辺の緑化と小平跡地の環境整備に取り組む」		香港の中国返還 山一證券自主廃業
1998	平10		大学の付属図書館がﾗﾝｷﾝｸﾞ１位に評価さる（朝日新聞）	
	4月	第25回総会後の懇談の場で 「国の予算で計上している大学の緑地整備費3千万円と対比してその5%にも達しない植樹会の寄付金のあり方に改めて疑問を提起、現時点の５倍を目標にした方策を講ずるべし」との提案があった。		イラク空爆
1999	平11			
	2月	石学長論文「キャンパスは大学の顔」を「国立学報」に寄稿		石原都知事誕生
	4月	第26回総会開催、石学長の挨拶から 「ゴミは自分の顔に泥を塗りたくるようなものだ。キャンパス内に散乱するゴミはまさに大学の顔を汚し、いくら研究・教育面で名声をあげても良い大学だとは胸をはって人前で誇れない。……学内がきれいなったといわれるよう努めたい」	 石 弘光学長	
2000	平12		大学院重点化完了	沖縄サミット
	4月	第27回総会での報告から 「東キャンパス校舎棟の南側の環境整備に注力した」	入学生総数1042名	
2001	平13		四大学連合憲章締結	９．11テロ
	4月	レバノン杉　小平キャンパスに植樹 第28回総会での植松会長の挨拶から「本植樹会としては引き続き『東校舎周辺の緑化』が一段落したので、小平地区の緑化にも力を入れてまいりたい」		小泉政権誕生
2002	平14		小平国際共同センター新設	食品偽装事件多発
	4月	第29回総会開催、総会後の観桜会には国立市「桜守の会」 大谷氏、動物写真家　大高氏が特別参加		通貨ユーロ統合 日韓共催FIFA　Wカップ開催
2003	平15		大学法人法成立、改革始まる	SARS の脅威
	4月	第30回総会の場での片柳梁太郎常務理事（植松会長の代理）の言葉から 「昨今、大学当局の緑化整備の努力にもかかわらず樹木や芝生の管理に手が回らず、『汚い危ない負の環境』になりかねない一面も出ているが、緑の環境保全には『不断のきめ細かい手入れ』が必要である」 植樹会から石学長に改革・提言の申し入れ	兼松講堂大改修 総合情報処理センター設置	イラク戦争  小平のレバノン杉
	6月	緑地管理のため調査開始	21世紀COE　プログラム3件採択	
	7月	現行形式のボランティア作業開始　第一回の参加者10数名、HP立ち上げ		
	12月	「国立キャンパス緑地基本計画」骨格固まる 如水会事務局との連携密接化		
2004	平16		国立大学法人一橋大学発足	チェチェン独立闘争
	4月	第31回総会開催、会長に岸田登氏（昭35経）就任 定款を大幅に改正（要旨）	法科大学院開設 北京事務所開設	
		1、会の目的変更（苗木を提供する植樹会から緑の環境保全を支援する植樹会へ） **2、大学当局を中心に OB と学生の連携強化（学生会員の新設）** **3、円滑な会の運営（常務理事、常務理事会の廃止）**		スマトラ沖大地震
		総会後に如水会からの言葉 「月一回の緑化維持、環境美化保全の現場作業を既に開始していると聞いております。今後はこの活動に学生諸君にも参加して貰い、教職員、OB、との新しいｺﾐﾆｭｹｰｼｮﾝの場が実現し、みなで作り上げた美しい緑の環境で、感受性豊かな人材を輩出することを期待しております」		日本の「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録 アテネ五輪
		「国立100年の森」プロジェクト　スタート 顧問に福嶋司東京農工大学教授就任		
	11月	福嶋顧問如水会館定例晩餐会で「基本計画と理念・保全」について講演※	「国立キャンパス緑地基本計画」が承認された	
	12月	基本計画策定後初の植樹実施 （※＝内容の詳細は HP でご覧になれます。以降同様）	杉山学長就任	

西暦		植　樹　会　関　連　ト　ピ　ッ　ク　ス	学内トピックス	学外トピックス
2005	平17		「記念植樹一覧」表完成	福知山線脱線事故
	4月	第32回総会開催、会長代行に田中政彦氏（昭35経）就任		ロンドン同時多発テロ
	7月	キャンパス外研修スタート、初回は群馬県玉原高原（ブナ林）見学 “一橋大学クリーンキャンパス　キャンペーン”応援参加	緑のデザイン賞受賞	郵政民営化選挙
2006	平18		「大学植生リスト」完成	
		「国立100年の森プロジェクト」が、文科省が発表した全国国立大学施設管理運営に関する先進11事例のひとつとなる		
	4月	第33回総会開催、会長に加納誠三氏（昭37経）就任 学生会員からも植樹会理事誕生	第一回ﾎｰﾑｶﾐﾝｸﾞﾃﾞｰ開催	ライブドア、村上ファンド事件
	5月	レスター・ブラウン博士（ｱｰｽﾎﾟﾘｼｰ研究所長、一橋大学名誉博士）特別会員となる※ 一橋祭・KODAIRA祭に植樹会として参加、以後毎年継続参加 『小冊子3号』に植生リスト掲載		世界人口65億人
2007	平19	卒業生記念植樹再開　（3月）		年金問題発生
	4月	第34回総会開催		
	9月	他大学キャンパスめぐりスタート、初回は玉川大学		
2008	平20		一橋大学基金の募金ｽﾀｰﾄ	世界的金融危機発生
	3月	植樹会顧問の福嶋教授に大学より「緑化推進」に対して感謝状贈呈あり。		
	4月	第35回総会での報告から「年間のボランティア作業参加者数933名を数える。」		
	9月	他大学キャンパスめぐり　東大駒場キャンパス見学		北京オリンピック
	10月	キャンパス外研修　千葉県亀山で三井物産フォレストと合同研修		
	11月	キャンパス外研修　玉原高原ブナ林作業		中国四川省で大地震
2009	平21	植樹会集会所（施設課分室）新設（3月）		
	5月	第36回総会開催、会長に籏野友夫氏（昭38経）就任 運動部各部との連携・協働作業の推進強化	Global COE Hi-stat Newsletter発刊 情報基盤センターを設置	裁判員制度スタート
	6月	キャンパス外研修　玉原高原（ブナ苗木植樹）、11月には神宮外苑、白金自然教育園見学実施	国際化推進本部を設置	
	7月	会員1100名を超す キャンパスツアー路の整備・ツアーの実施		民主党政権誕生

記念植樹

植樹会活動に対する想い　-小冊子掲載文からの抜粋-

故：植樹会元会長　岸田　登（昭35経）

大学の緑は教育環境に様々な恵みを与えてくれる。一つは「防音効果」。元々キャンパス周辺は静かであるが、森があることによって更に静かになる。二つ目が「温度調節」。三つ目は「酸素供給」。四つ目は「フィトンチッド（木の精）」を放出する。更に、緑は眼や心の疲れを癒してくれる等、様々な恩恵を与えてくれる。この様に大学の先生方、学生の皆さんは無意識の中に非常に恵まれた環境で、研究・勉学されているということができる。

今大学の森は手入れ不足で荒れている。この貴重な財産を後世に引き継いで行こうというのが植樹会の「思い」である。幸い大学当局も思いは同じで、大学緑地全体に関して、『国立キャンパス緑地基本計画』を作成し、緑化維持の計画性、永続性を図ることになった。

先ず、如水会員には更に「母校の緑」に関心を持って頂き、大学当局の方針を充分踏まえながら、出来ることから取り組んで行く方針である。具体的には従来の活動に加え、大学が作成した「国立キャンパス緑地基本計画」に基づき、月一回の緑化維持、環境美化保全の現場作業をボランティア活動として開始した。

今後はこの活動に学生諸君にも参加して貰い、教職員、OB、学生との新たなコミュニケーションの場が実現し、共同作業を通じて一体感が醸成出来ると期待している。また皆で作り上げた美しい緑の環境で、感受性豊かな人材を輩出することが植樹会の遠大な目標でもある。

樹木は我々人間よりずっと長生きする。母校の森も例外ではなく、この森を世話していくためにも、植樹会を通して先輩から後輩にこの「思い」を伝えて、永続的に行動することは大きな意義があると思う。大学法人化を契機に教職員、OB、学生が一丸となって大学の緑を守っていくことが「自然保護」、「教育環境保全」に繋がるものと考える。（了）

春の「岸田」ロード

岸田元会長は会長就任直後に急逝されました。原文は「植樹会小冊子（2004年12月発行）」に掲載されたものです。※

《座談会》

-- 植樹会の転換期を語る --

2003年4月5日に開催された第30回総会で、一橋植樹会は大きく活動方針を転換しました。この転換期に活躍をされた方の中から福嶋司氏（当時東京農工大学教授）、田﨑宣義氏（当時社会学研究科長兼社会学部長）、田中政彦氏（当時植樹会常務理事）に当時を振り返って頂きました。（司会は植樹会佐藤征男氏）

司会：田中さんは故岸田登元会長とともに2003年4月22日、母校に石学長（当時）を訪ねられ、緑の環境改善を促す提言をされたと聞いています。

田中顧問

田中：大学の緑を「よくここまで放っておいたものだ」というのが、当時の率直な思いです。当時、相当たくさんの木を植えて、キャンパスを緑豊かにしようという意図は、至る所に見えていました。しかし手がつけられなくなった部分があったんだろうと思います。植樹会の方にしても「植樹会の歴史的使命はもう終わった」という意見もありました。然し、折角ＯＢも熱い気持ちを持っているわけだからと、岸田氏と一緒に緑の管理の必要性を申し入れたら、快く大学に受けとめて貰いました。「それなら一緒にお手伝いしよう」という気持が盛り上がりました。当時の会員数は150人位で、いってみれば苗木を寄付する人たちの集団、大学の教職員の皆さんや学生は含まれていませんでした。

田﨑：大学では緑は大事だという認識があり、「一本たりとも切るべからず」という風潮でした。1999年１月に図書館の拡張工事で大きいヒマラヤスギを伐採しましたが、そこに辿り着くまで学内の議論が大変でした。石学長と安藤図書館長が木の前でお別れの言葉を述べ、２本の木にお神酒をあげてそれでやっと切るという状態。こんなことでは建物も建てられない。遷移も進む。このままではまずいな、というのが最初の出発点です。お話に出た2003年の４月22日、石先生に呼ばれて学長室に行ったら、田中さんと岸田さんが居られて、そこで「木の手入れをするから頼むぞ」という話になったんですね。そこからです。植樹会が変わって行った事が大学を変える力になったと思います。そしてその頃、知り合いになっていた福嶋先生にお知恵を借りることになりました。

司会：福嶋先生、最初にキャンパスをご覧になって驚かされましたか。

田﨑教授

福嶋：いや吃驚しました。

司会：キャンパスの調査もされたんですね？

田﨑：そうです。記憶では同年の6,7,8,11月と４回位、全部キャンパスを周って。

田中：福嶋先生は、これは皆が見て、皆の気持で決めなきゃならないことだから、よく見て勉強して判断して下さいという事でした。

司会：そうした植樹会と大学が連携する流れの中で、大学は「国立キャンパス緑地基本計画」を2004年12月に決定しましたね。

田﨑：福嶋先生に田中さんや施設課の皆さんも一緒になって作って下さったのを大学の正式の方針として決めました。そのずっと以前、2001年11月に福嶋先生にキャンパスを見て頂いた。その時に、「これはゾーニングをして、計画的に管理して行った方がいいですよ、必要であれば私がお手伝いしてもいい」と言って下さったのを覚えています。

福嶋顧問

福嶋：私は本当にお手伝いをしただけですから。

田﨑：普通、建物の基本計画はどの大学にもあると思いますが、緑地の基本計画を持ったのは、国立大学では多分うちが初めてだと思います。

福嶋：初めてでしょうね。うち（農工大）にもないんですよ。

田中：私が言うのも何ですが、実際は2003年６月に福嶋先生の頭の中には基本計画はもう全部入っていたんです。

福嶋：限られた空間ですけれども、武蔵野の自然も残っているし、人の生活する場所でもあるし、植生管理という私の専門部分の「人間との関係」、「自然との関係」のあり方を勉強するのに非常にいいフィールドだという感じはありました。

司会：その後、その基本計画に則って作業を進めてこられましたが、最初参加者はどうでしたか。

田中：2003年７月から調査と平行してボランティア作業をやったんですけど、少なかったです。10人強位ですかね。

司会：植樹会の学生、教職員、ＯＢと３者での全学運動という意識は最初からですか？

田﨑：2003年11月位が最初だったと思います。社会学部の会議室で集まりましたっけ。

福嶋：野鳥などに詳しい中野晶子さんなどの学生もその段階から関与していました。

田中：本来は、学ぶ学生達と、仕事をしたり研究をしている先生方と職員が守っていくものですね。故岸田会長の考え方ですが、学生もただ享受するだけではなく、緑に参画していく。

司会：そういった理念といえるものは意識として浸透してきたと言えますか。

田中：強くそう思います。それはやはり福嶋先生の指導を受けてやっていくでしょう。そうすると、綺麗になって来るから自信がついてくる、それは老いも若きも僕は一緒だろうと思います。

司会：こういったことは日本の他の大学であまりありませんね。

田﨑：ないと思います。聞いたことがない。私どもは誇るべき活動を持っていると思います。またゼロ・エミッションとゾーニングとボランティアの三つは福嶋先生の始めからのアイディアです。これがまた素晴らしいですね。

福嶋：基本計画策定の時に皆で議論していたら、やはり捨てるものはないと。枯れた木でも置いておけば別の昆虫だって生活できるし、それをまた食べると鳥もいるし、外に資源を出して捨ててしまうよりは、中でとにかく回すような恰好の方がいいじゃないかという話になったんですね。その時の基本計画の幾つかのキーワードの一つが、今述べたゼロエミッション。

『基本計画』

田中：「基本計画」を作る前の調査時にキャンパスを周りました。それこそ竹藪などをかき分け、かき分け。全部綺麗にするというイメージもあったのですが、「そのままの形で残すところもあるんだ」という事をものすごく新鮮に受け取りました。ゾーニングの重要性を納得しました。

福嶋：ゾーニングする上でのポイントは、人間が一番たくさん出入りして使う所と、そうでもない所。求める機能も違うわけです。一番人が使う所は憩いの場所であるし、リラックスできるような中心部。その全く逆が周辺部です。周辺部は外とのある意味、隔離の部分、防音とか砂ぼこりを外に出さないという機能もある。同時に手を余り入れないという所で、野生の動物、特に竹藪にはウグイスなんかが生活しています。両方の中間部分というのは、桜を多く植えてある部分や武蔵野雑木林の流れを残している部分で人間が使い、自然の力にも任せるという、その両方の感覚。

司会：緑地基本計画の中には、都市緑地における緑の考え方もあると思いますが、教育・研究というキャンパス機能のあり方もあると思います。

田﨑：80年以上前大学が国立に移ってきた時、「自然環境に恵まれた中で教育し、研究することが、大学にとって一番いい」という考え方があった。それをこれからも維持したいというのが当時の一番の考え方でした。ヨーロッパの僕が訪問した大学では、キャンパスの緑を管理するセクションがちゃんとありました。ところが日本の大学でそういうものを持っているところはどこにもない。大学としてこの緑を大事にしていくことが大切です。またキャンパスの緑は多摩地区の中でも貴重な緑です。それをこれからも維持して大事にしていくというのは、地域社会にとっても大事なことだと思います。

司会：では、今後の活動について考え方をお示し下さい。

作業の一コマ

田﨑：基本計画は大学が機関として決定したものですから、それを活かすことが第一です。また、ただ墨守するのではなくて、必要があれば見直す。それからもう一つは、キャンパスの緑を通して教え学ぶ場ができるといいなと思います。

福嶋：作業を7年間やってきて、第1段階は終わったかなという感じはします。それは基本計画に沿って作業した成果が出ていると思いますが、第2段階となると、「伐採した所」「木がない所」に今後どういう緑をつくっていくかということです。東キャンパスを中心にして、もう少し緑の進展があってもいいという感じはしています。それぞれの場所で管理の仕方を考えていかなければいけません。それぞれの場所のカルテを見て、それがどこまで達成できているのか、できていないのか。チェックをやっていくことが必要だと。もう一つは、教育にこの自然をどう生かしていくのか？この必要性は非常にあると思います。

作業だけでいいのか、あるいはカリキュラムの中にそういうものを組み込んで、実際に接するようなフィールドワークをやっていくのか。外からわざわざ講師を招かなくてもＯＢの方が直接話をするという形があってもいいでしょう。やり方に関していろいろなアプローチができるんじゃないか。イベントとして、遊び心も持ちながら進めることもいい。ススキの草原をつくったなんていうのは月夜の十五夜を見ようかというのがその例です。先はちゃんと見据えていれば、いろいろなことがあってもいいなと。そんな感じがします。

司会：2003年以降ずっと活動してこられた田中さん、今の段階はどこまで来たとお考えですか。

田中：さっき、福嶋先生が第一期が終わったという表現をされましたし、田﨑先生も熱き思いがまだ全部実現したわけではないというし、そういった意味では当時を思い出すと非常に大変なエネルギーを私は自分で使ったと今でも思っています。それでもいろいろな視点から見てまだまだやることはたくさんあるという思いです。ですからぜひこれからも植樹会の皆さんには活躍していただきたい、頑張ってほしいということです。（了）

（2010年4月 如水会館にて）

西暦		植　樹　会　関　連　ト　ピ　ッ　ク　ス	学内トピックス	学外トピックス
2010	平22			日本航空会社更生法申請
	3月	第二草原ゾーンに着手	国立移転80周年	
	5月	第37回総会開催	兼松講堂ﾚｼﾞﾃﾞﾝﾄｵｰｹｽﾄﾗ誕生	
	10月	休日作業初回実施	山内学長就任	
2011	平23			中国 GDP 世界第二位
	5月	第38回総会開催	外国人留学生数689名に	東日本大震災（3.11）
	10月	休日作業第二回実施		
	11月	新生植樹会ボランティア作業100回実施		
2012	平24		YouTubeに大学公式ﾁｬﾝﾈﾙ開設	
	4月	「寄付講義；緑の科学」開講※		東京電力国有化
	5月	第39回総会開催 会長に八藤南洋氏（昭40経）就任	「一橋大学ﾌﾟﾗﾝ135」発表	日銀大幅金融緩和策発表
			法科大学院司法試験合格率２年連続第一位	
		会員1300名を超すとともに、年間作業参加者1400名弱に達す		衆議院選挙、ねじれ解消
2013	平25			
	3月	「基本計画」のレビュー現場検証一段落		
	5月	第40回総会開催 一橋植樹会発足40年・新生植樹会10年記念式典開催	引続き格付けAAAを取得	富士山、世界文化遺産に登録
	6月	キャンパス外研修、町田市図師小野路訪問	一橋講堂が大学の手で運営開始	2020東京五輪決定
	10月	雑木林再生のための植樹始まる		
2014	平26			消費税率8%に
	5月	第41回総会開催	科研費、新規採択率全国1位に（10年連続）	
	6月	「国立ｷｬﾝﾊﾟｽ緑地基本計画」ﾚﾋﾞｭｰ／検証作業実施 休日作業第五回実施 大径木の測定調査を行う		米・ｷｭｰﾊﾞ国交正常化へ
			蓼沼学長就任	外国人旅行者13百万人超
2015	平27		CFO 教育研究ｾﾝﾀｰ発足とＨＦＬＰの開始	
	5月	第42回総会開催 休日作業・年度１回目実施 雑木林再生植樹およびマツの補植継続	文科省の『大学施設戦略報告』に国立ｷｬﾝﾊﾟｽが掲載される	日経平均株価２万円超 ｷﾞﾘｼｬ危機
	9月			安全保障関連法が成立
	10月	休日作業（年度２回目）		
2016	平28			
	3月	キャンパス内で育てたサクラの苗木を移植		
	5月	第43回総会開催、会長に津田正道氏（昭42商）就任		
	6月	休日作業（年度１回目）		
	8月			天皇陛下、退位の意向示唆
	11月	満10年を迎えた「一橋祭・森のクラフト教室」大盛況		
2017	平29			米国大統領ドナルド・トランプ就任
	5月	第44回総会開催 キャンパス外研修（浜松「龍山ホソバシャクナゲ育成地」見学		
	7月	休日作業に過去最多の参加者（233名）		
	9月	要管理木の実態調査（西キャンパス）		
	10月	要管理木の実態調査（東キャンパス）、 キャンパス外研修（福島県南会津郡只見町のブナ樹林の見学）		
2018	平30			
	4月		経営管理研究科を設置	
	5月	第45回総会開催　アカマツ基金創設 キャンパス外研修（福島県只見地方）		

西暦		植　樹　会　関　連　ト　ピ　ッ　ク　ス	学内トピックス	学外トピックス
	7月	休日作業（年度１回目）		
	8月	サンデー毎日８月５日号に掲載の如水会特集に植樹会の歴史と活動が紹介される	全学共通教育センター及び国際教育交流センターを設置	
		石弘光元学長ご逝去		
	10月	休日作業（年度２回目）		
	11月	キャンパス外研修（神代植物公園と国分寺崖線周辺の植生見学）		日産ゴーン会長を逮捕
2019	令元			
	5月	第46回総会開催、会長に河村進氏（昭49経）就任 キャンパス外研修（中央構造線の村である長野県大鹿村の自然を訪ねる）		元号「令和」へ改元
	7月	休日作業（年度１回目）		
	9月	第200回目の定例作業	指定国立大学法人に指定される	
	10月	休日作業（年度２回目）		消費税率10% に
	11月	定例作業200回記念植樹	職員集会所使用停止	
	12月			新型コロナウイルス感染症発生
2020	令2			イギリスが EU 離脱
	2月	東京商科大学予科校舎旧跡記念碑の清掃		
	３月	新型コロナウイルス感染症拡大の影響で 定例作業中止（その後2023年４月に再開するまで中止が続く）		
	5月	第47回総会開催（書面表決にて実施）		
	7月	会員少人数で臨時作業として活動再開		
	9月	大学キャンパス内でナラ枯れ病によるコナラの枯死多数判明	中野学長就任	菅政権誕生
	11月		一橋祭オンライン開催（翌年も）	
	12月	キャンパス外研修（国立市の湧水、自然と歴史を訪ねる）		
2021	令3			米国大統領ジョー・バイデン就任
	4月	「寄附講義・緑の科学」10年目を迎える		
	5月	第48回総会開催（書面表決にて実施）		
	7月			東京五輪開催
	10月			岸田政権誕生
	11月	キャンパス外研修（東村山市の自然と歴史探訪）		
2022	令4			
	2月			ロシア軍がウクライナに侵攻
	3月		東本館リノベーション	
	5月	第49回総会開催（書面表決にて実施）		
	7月			安倍晋三元首相銃撃事件
	12月	キャンパス外研修（玉川上水、立川市砂川周辺の探訪）		
2023	令5			
	4月		ソーシャル・データサイエンス学部・研究科を設置	
	5月	第50回総会開催 一橋植樹会創立50周年・新生一橋植樹会発足20周年記念式典開催		

《座談会》

-- 近年の植樹会活動について --

2023年は一橋植樹会創立50周年、新生植樹会発足20周年の節目にあたります。また現在の「植樹会の歩み」発行から既に8年が経過していることから、「一橋植樹会の歩み」の改訂版を作成することになりました。

そこで近年の活動の主な出来事を残しておこうと、福嶋司氏（東京農工大学名誉教授、植樹会顧問）、津田正道氏（植樹会前会長）、河村進氏（植樹会会長）、飯塚義則氏（植樹会作業班長）にここ数年の活動の状況、緑の環境変化、今後の活動の在り方等について語っていただきました。

（司会は植樹会広報班長　小山　修氏）

福嶋氏、飯塚氏

司会：今回の改訂に際して、新型コロナ感染症を経験しての近年の活動の足跡と将来への展望についてご出席の皆様に語っていただきたいと思います。

さて活動の足跡についてですが、活動の中でここ数年の目立った動きというとどういうことがあげられますか。

河村氏、津田氏

河村：やはり、活動の中心である作業について、月1回行われていた定例作業がコロナ禍下、現時点で約3年行うことが出来なかったことです。代わりにというわけではありませんが、会員有志がかなり高い頻度で作業を行った結果、むしろコロナ以前よりキャンパス内の緑が綺麗になったのではないかと思っています。ただ、それでも作業すべきと思われる部分の全部はやりきれていないというのが実態です。

コロナ下マスクをしての臨時作業

司会：その作業はどのくらいの頻度で行ってきたのですか。

飯塚：月4～5回、1回あたり5時間余りの作業です。最近はこれが常態化して、入構規制もなくなったので1日平均約10名程度の卒業生が参加して作業を行っています。お蔭で、参加者の技術の向上もあり、毎回効率的に作業を行い、必ずしも全てとは言えませんが、ほぼ計画通りに作業を実施できています。

司会：学生と共同で行う作業も増えているようですが、学生参加の活動はどのように行われていますか。

飯塚：おっしゃるとおり、定例作業が行われていない状態ですが、運動部との共同作業は年々拡大、活性化しています。陸上競技部、ラグビー部、男女ラクロス部、ハンドボール部、弓道部、硬式テニス部、硬式野球部、フィールドホッケー部、空手道部がそうです。学生も下級生にしっかり引継が行われるようになり、自分達の活動環境を整備することにも関心を深め、以前に比べてその主体性も格段に増しています。このことは、作業結果の充実や効率性にも寄与しています。植樹会の活動への学生参加は、共同作業を核にし、時間の少ない定例作業は作業体験の場として位置付けたほうがよいのかもしれません。

運動部との共同作業

河村：定例作業は現時点で再開の目途はたっていませんが、月1回、実働2時間程度なので多くの学生が一堂に集まってくれるものの実際は作業の成果を求めるというより、活動を体験してもらうことでキャンパスの緑への理解を深めてもらい、また植樹会の存在を広く知ってもらう機会との位置付けと考えています。学生の作業参加の主体は運動部や一橋祭運営委員会等の団体との共同作業が中心になっているし、これからもそうなっていくと思います。

津田：その通りです。運動部だと動きも機敏だし、自らの活動の舞台ともいうべきところを綺麗にするということの意識の高さもあり、取り組みも真剣で効率的な作業になっていると思います。

福嶋：学生の参加は授業への出席が減るということ問題はありませんか。

要管理木調査

河村：それは全くありません、授業があれば途中で作業を抜けていきます。授業の合間に参加しているイメージです。

飯塚：それでは、話題は転じますが、私から、樹木管理の一環としての要管理木について触れさせていただきます。臨時作業でキャンパスへ来る機会が増え、ここ数年観察していますと衰弱木や枯死木が目立ちます。衰弱や枯死により放置しておくと危険な樹木、鳥散布などにより意図せざる場所に発芽、成長したその場所に相応しくない樹木、景観上問題のある樹木、互いに干渉しあっている樹木などを要管理木と呼んでいますが、これらの樹木もしっかりと見ていかなければなりません。

司会：これら要管理木はどのような形で大学側と情報の共有化を行っているのですか。

飯塚：1年に一度定期的にキャンパス内を巡見、リストを作成し四半期毎に大学の施設課と行っているワーキングチームのミーティングでその状況について情報の共有化を図っています。間伐、除伐の必要なものは都度アドバイスを行うようにしています。

大学側ではキャンパス内の樹木管理のためナンバーリングを行っており、実施済みのものでその数は約2,500本もあります。その番号も植樹会として共有させていただき、ともに無駄のない管理体制を構築することも大切です。大学との連携が大切です。

司会：ワーキングチームのミーティングもあり、大学の施設課との連携はかなり良くなっている印象がありますね

河村：2017年1月以来四半期ごとに開催されていますが、このような機会は勿論のこと、普段のコミュニケーションが極めて大事だと思っています。

司会：要管理木という話がありましたが、今はナラ枯れが問題になっています。また、少し下火になったとはいえ一時松枯れが問題になりましたね。

津田：アカマツについては昭和初期の国立移転に際して、300本を移植して約2,000本が一橋大学のシンボルとして大事にされてきました。ところが昭和40年代以降松枯れが蔓延しました。その対策として、大学・如水会・植樹会3者が共同発起人となり2018年5月の総会で「アカマツ基金」を立ち上げ、手始めとして如水会から200万円の御寄附を頂きました。

設立から5年目に入りましたが、この間170件余累計960万円超のご寄付を頂戴しています。

司会：この基金、現在はどのような状況になっていますか。

津田：他のアカマツへの蔓延防止のため、多くの松枯れ木が伐採されましたが、大学は7年間有効な薬剤樹幹注入の継続により現在は松枯れ木はほぼ無くなりました。植樹会としては毎年その費用の約半分を補助させて頂いています。また、補植事業として過去10年間でおよそ60本のアカマツを新植してきました。薬剤注入継続と今後アカマツの補植の為の資金募集の必要性は止む事がありませんので引き続きアカマツ基金へのご支援をお願いしたいと思っています。

ナラ枯れ

司会：ナラ枯れについてはキャンパス内ではどのような状況ですか。

河村：ナラ枯れは要管理木対策の一環です。大径木が多いので必要なものは大学側が業者に依頼して伐採しています。大学では、昨年は一気にナラ枯れのコナラや近隣への影響のある40本の木を伐採したと聞いています。

飯塚：今まで樹木の話が中心でしたが、キャンパスの自然の保全の観点からは野草も大切です。

司会：野草と言えば、キャンパス内には珍しい、貴重な野草もあるのですよね。

飯塚：キンラン、ギンラン、イチリンソウ、キランソウなど数多くの在来種の珍しい野草がキャンパス内には存在し、残していくべきものです。また、これらの野草は季節を通じて見る人に潤いを与え、心を和ませてくれます。一方でキャンパスでは、外来植物の侵入と繁殖がとても目につきます。オオブタクサ、ワルナスビ、アメリカオオアザミなどです。これらの植物は在来種の野草を駆逐し、景観上も良くありません。意識的に駆除しなければならないものですが、キャンパスは広く、ここ3～4年の顕著な外来植物の侵入と繁殖に追いついていないのが実情です。地道な忍耐強い対応が必要です。

キンラン群生

司会：大径木の伐採によりキャンパス内のあちらこちらに空間が生じ、明るくなった感じがします。植樹もキャンパスの森の円滑な世代交代の観点から考えていく必要があるのではないですか。

福嶋:木は大きくなり、年数を重ねれば弱ってくる。弱った木はケアしながらもそれが無理な木は処理して、空いた空間に新しい世代を育てるという考え方も必要です。

河村：木が多く除去された結果、緑の環境、景色が変わってきています。何を植えたら良いのか、そろそろ具体的に考えてこの場所にはこれを植えましょうといったような提案を植樹会としても行っていかないとなかなか進まないと考えます。ついては福嶋先生にも是非お知恵をお借りしたいと思っています。

福嶋：樹種の選定にあたっては日当たり等の環境を考慮する必要があります。また、大学は若者がすくすくと伸び、羽ばたいていく場所ですのでそこにはまっすぐ天に向かって伸びていくような木が理想です。街路樹や公園などで、せっかくまっすぐに伸びて枝を広げた木を日陰になるとか、落ち葉が多いとかの理由で強剪定して電柱に少しの枝を付けたようなケヤキをよく見かけます。人間に「人格」があるように、木にも「樹格」があります。これは私の造語ですが、樹格を尊重して、大切に管理したいと思います。

飯塚：樹種の選定に当たっては、維持・管理に多くの手間や費用がかかるものは避けることも必要だと思います。しかし、武蔵野の景観を残すという観点も大切です。

福嶋：今までは緑を集団としてとらえ、場所によって森が果たす機能を意識してきました。アカマツやコナラなどの枯死が進んだ現在、これからはその森を構成する木の一本一本をチェックしながら管理していくことが重要になってきています。

司会：国立キャンパス緑地基本計画が策定されてから約20年になりましたが。

飯塚：自然は生き物で、時を経てその姿を変えていきます。必要なところは見直しをし、置かれた状況に対して柔軟に対応していくことも大切でしょう。

河村：レビューが2015年に行われて以来相応の年数が経っていることから1年か2年後には再度レビューを行う必要があると思います。今回を機に改めて基本計画を隅から隅まで読み直しましたが、大筋計画通りに進んでいます。細かいところはともかくそんなに大きく変える必要はないというのが私の思いです。特にゾーニングのコンセプトは全く変える必要はないと思います。

飯塚：一部は手を付けても良いのではありませんか。例えば野球場南側の林内のクズなどは、ゾーンⅣですが除いても良いのではないでしょうか。覆われた樹木が枯れてしまっています。

福嶋：あそこは林床にササがあり、鶯をはじめ動物の生息場所としても大切です。しかし、在来種で森を作っておくことも重要です。クズの除去に加えて、外国産のトウネズミモチの繁茂も目立ちます。それらは積極的に除去すべきです。

司会：話は変わりますが、植樹会の寄附講義「緑の科学」が昨年スタート以来10年を迎えましたが。

津田：今日は講師をお願いしている方が2人もいらっしゃいますが、この講義は植樹会にとって極めて大事にしたいものです。毎年60名が講義を受講、植樹会の活動の理解者が増えていることになります。受講希望者も多く、毎年競争倍率も高いと聞いています。

河村：今年、主任教授も筒井先生から藤元先生に変わるのでカリキュラムの見直しも必要かと思われます。植樹会としても主任の先生と早期に相談したいと思います。

一橋植樹会寄付講義『緑の科学』立上げの経緯

～植樹会通信2021年5月号からの抜粋～

植樹会元会長　八藤南洋（昭40経）

2004年に新生植樹会として再出発し、「国立キャンパス緑地基本計画」に基づき卒業生、教職員、学生の三者が一体となりキャンパスの緑化推進、環境整備の活動を行ってきました。7年を経た2011年には作業活動のおかげで、大学の教育研究に相応しい環境に整備されてきていると評価されるまでになりました。学生の作業参加も増え続けました。こんな中でキャンパスの緑（自然）を通じてもっと学生の教育にも資することはできないか、先達の熱い思いを実現する手立てはないものか、植樹会の「あり方会」で検討を始めたのが2011年6月でした。各メンバーが私案を出しいろいろな議論を重ね、約半年後の11月に寄附講義「緑の科学」の提案書を大学に提出し2012年初めに承認されました。
本講義の目的は、学生が緑に関心を持ち、また緑の重要性を認識し、そのために自らが行動する人間になることを学んでもらうこと。即ち21世紀のリーダーに求められる地球環境を守ることを行動規範とする人材の育成にもつながる、と考えました。
本講義は座学を中心とするも、フィールドワークも織り込み、「観て、触って、知る」キャンパスツアー、自然の観察、植生管理、環境整備作業等の実体験にも重点を置くことにしました。
2012年4月～7月に第1回となる初めての講義を実施しました。
受講した学生は、初めてかつ珍しい講義であったことから、肯定的、好意的に受けとめたようです。キャンパスの大きさに驚いた、美しさを認識した、また樹木の測定や健康検査等など関心を持った、という感想が多く寄せられました。
講師陣は福嶋司氏、筒井泉雄氏、関統造氏、皆植樹会役員で本件立ち上げ準備前から参画をお願いしていました。
母校では「如水ゼミ」をはじめ、多分野に広がる企業による寄附講義が開講されていますが、その中で我々の寄附講義は異色であり、学生に評価され、関係者に支えられる限り、継続し、益々発展することを願ってやみません。

（寄附講義「緑の科学」は2023年（令和5年）4月現在、12年目の講義が行われています）

司会：これまで各テーマについていろいろ今後の在り方を含め、お話いただきましたが最後にこれだけは伝えたいということはありますか。

河村：冒頭の作業についてですが、今作業の中心を担ってくれている人たちは年齢的にも70歳前後で意欲も高いですが、今後5年後、10年後に同じようなサービスが提供できるかはなはだ疑問でいかに後進に繋げていくかが重要だと思っています。

福嶋：植樹会のメンバーは大学を愛しています。また、様々な経験を有している人たちです。これからも皆で考え、積極的に大学に提案する団体として活動してほしいと思います。

司会：本日はどうも有難うございました。

（2023年1月 如水会館にて）

国立キャンパスと「人新世」

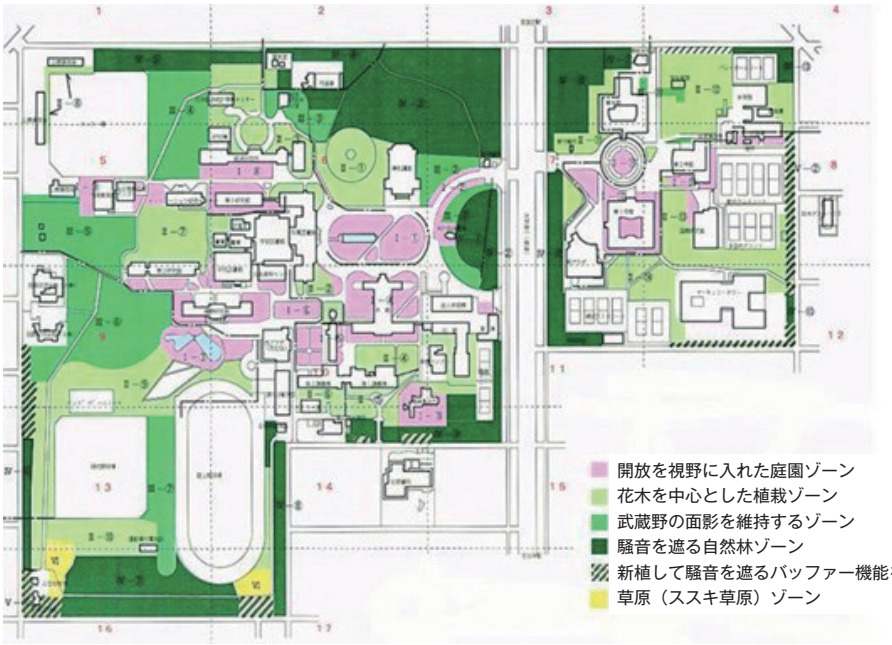
2023 年、一橋植樹会は創立 50 周年を迎え、また、新生一橋植樹会として創立 20 周年を迎えました。この機会に改めて、一橋植樹会会員の皆様、ご協力いただいてきた皆様に、一橋大学キャンパスの緑化推進、環境整備・保全に対する御支援に深く感謝申し上げますとともに、一橋植樹会が、その活動をとおして環境保全の精神を養い、環境問題解決への取り組みを推進していくという目標に向けて、一橋大学がともに歩んでいくことを誓いたいと思います。

1960 年代末、増田四郎学長の提唱に応えて植樹運動がスタートしたとき、その先頭に立った加藤弥兵衛氏は明治 39（1906）年の卒業であったと聞いております。時は辛酉事件の 2 年前、母校・東京高等商業学校（当時）のキャンパスは、このときまだ文字通り一橋にありました。以来、前後 100 年を優に超え、120 年にも迫る幅の世代が、国立キャンパスの緑化と環境保全に取り組んできたことになります。とりわけ 2004 年には「100 年の森」をめざす「国立キャンパス緑地基本計画」が定められ、国立キャンパスを愛する卒業生、現役学生、教職員が集い定例作業に取り組む一橋植樹会の姿は、一橋大学にとって欠かすことのできない営みの風景となりました。

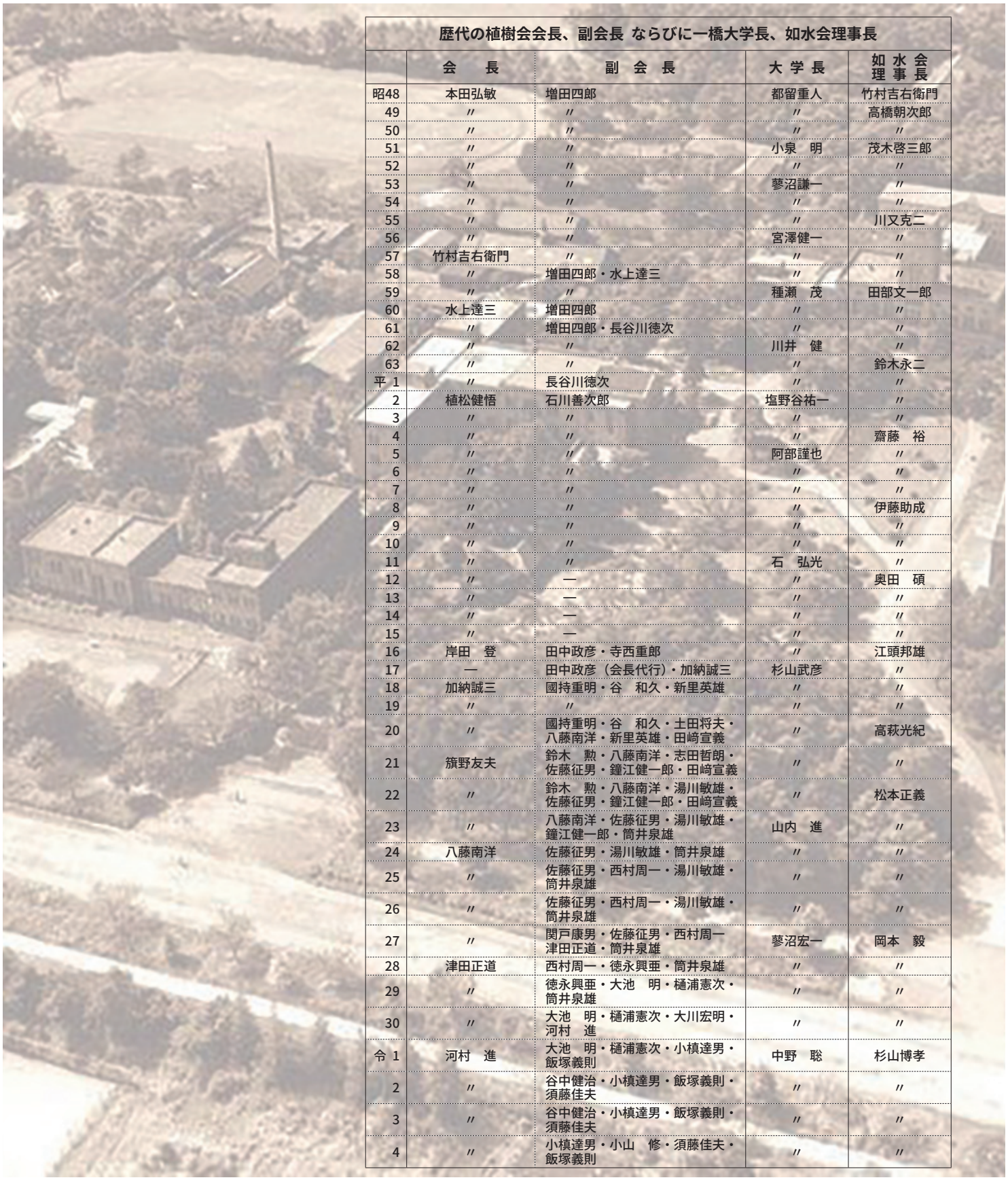
ご存知の方も多いと思いますが、国際地質科学連合が、近く、地球史上の新たな地質年代として「人新世（Anthropocene）」の認定を宣言する見通しであることが話題になっています。同連合のウェブサイトなどによれば、人間活動が地球規模で指数関数的に加速した結果として、20 世紀後半に至って人間と自然の関係は決定的に変化し、今や地球環境の行方に対して人類が行使する圧倒的な影響は、地層にその痕跡を永続的に残す段階に入っているというのです。

人類史と地球史におけるこのような時代に生きる私たちにとって、地球とその自然は、もはや消極的に放置すれば良い存在ではなく、私たちがその保全に深い責任を負い関与していかなければなりません。国立キャンパスは、まさに「言うは易く行うは難し」であるこの課題を学び、実践する場でもあります。このような意識をもって、一橋大学の全ての構成員が、一橋植樹会とともに、キャンパスの緑を豊かに育てる未来を構築していきたいと念じております。

一橋大学長　中野　聡



左は**「国立キャンパス基本計画図」**



歴代の植樹会会長、副会長 ならびに一橋大学長、如水会理事長

	会　長	副　会　長	大 学 長	如水会理事長
昭48	本田弘敏	増田四郎	都留重人	竹村吉右衛門
49	〃	〃	〃	高橋朝次郎
50	〃	〃	〃	〃
51	〃	〃	小泉　明	茂木啓三郎
52	〃	〃	〃	〃
53	〃	〃	蓼沼謙一	〃
54	〃	〃	〃	〃
55	〃	〃	〃	川又克二
56	〃	〃	宮澤健一	〃
57	竹村吉右衛門	〃	〃	〃
58	〃	増田四郎・水上達三	〃	〃
59	〃	〃	種瀬　茂	田部文一郎
60	水上達三	増田四郎	〃	〃
61	〃	増田四郎・長谷川徳次	〃	〃
62	〃	〃	川井　健	〃
63	〃	〃	〃	鈴木永二
平 1	〃	長谷川徳次	〃	〃
2	植松健悟	石川善次郎	塩野谷祐一	〃
3	〃	〃	〃	〃
4	〃	〃	〃	齋藤　裕
5	〃	〃	阿部謹也	〃
6	〃	〃	〃	〃
7	〃	〃	〃	〃
8	〃	〃	〃	伊藤助成
9	〃	〃	〃	〃
10	〃	〃	〃	〃
11	〃	〃	石　弘光	〃
12	〃	—	〃	奥田　碩
13	〃	—	〃	〃
14	〃	—	〃	〃
15	〃	—	〃	〃
16	岸田　登	田中政彦・寺西重郎	〃	江頭邦雄
17	—	田中政彦（会長代行）・加納誠三	杉山武彦	〃
18	加納誠三	國持重明・谷　和久・新里英雄	〃	〃
19	〃	〃	〃	〃
20	〃	國持重明・谷　和久・土田将夫・八藤南洋・新里英雄・田崎宣義	〃	高萩光紀
21	籏野友夫	鈴木　勲・八藤南洋・志田哲朗・佐藤征男・鐘江健一郎・田崎宣義	〃	〃
22	〃	鈴木　勲・八藤南洋・湯川敏雄・佐藤征男・鐘江健一郎・田崎宣義	〃	松本正義
23	〃	八藤南洋・佐藤征男・湯川敏雄・鐘江健一郎・筒井泉雄	山内　進	〃
24	八藤南洋	佐藤征男・湯川敏雄・筒井泉雄	〃	〃
25	〃	佐藤征男・西村周一・湯川敏雄・筒井泉雄	〃	〃
26	〃	佐藤征男・西村周一・湯川敏雄・筒井泉雄	〃	〃
27	〃	関戸康男・佐藤征男・西村周一・津田正道・筒井泉雄	蓼沼宏一	岡本　毅
28	津田正道	西村周一・徳永興亜・筒井泉雄	〃	〃
29	〃	徳永興亜・大池　明・樋浦憲次・筒井泉雄	〃	〃
30	〃	大池　明・樋浦憲次・大川宏明・河村　進	〃	〃
令 1	河村　進	大池　明・樋浦憲次・小槙達男・飯塚義則	中野　聡	杉山博孝
2	〃	谷中健治・小槙達男・飯塚義則・須藤佳夫	〃	〃
3	〃	谷中健治・小槙達男・飯塚義則・須藤佳夫	〃	〃
4	〃	小槙達男・小山　修・須藤佳夫・飯塚義則	〃	〃

（敬称略、会長名は年度総会時）

（背景写真は、国立移転後間もない頃撮影されたと思われます）

Let's Green & Clean
一橋植樹会

http://www.hitotsubashi-shokujukai.jp/

編集委員会注：個別には注釈を付しておりませんが、本誌編集に際し、大半の資料を「如水会々報」、「一橋大学年譜」から引用、転載しております。